

より良い学習英文法の構築に向けて

— 一定形節と非定形節の区別に着目して —

高橋 保夫

抄録：本稿は言語学研究成果を活用した、より良い学習英文法構築の一環として、定形節と非定形節の区別に焦点をあてて考察するものである。そもそも学習英文法において非定形節は導入されていない。まず非定形節を句として扱うのではなく節として扱うことの意義から非定形節の教育への導入を主張する金子（2018）を概観する。その上で非定形節を導入する意義は定形節と非定形節を区別することにあると主張する。

キーワード：学習英文法, 定形節, 非定形節.

1. はじめに

(1) は筆者が卒業研究の授業で、学生に統語論の基礎的知識を身に付けさせるのには最良の一冊と思い、第一版から延べ10年間以上使用してきた教科書の節のタイプに関する説明の箇所から引用した例文である。

(1) a. I know [you eat asparagus].

b. I've never seen [you eat asparagus].

(Carnie 2013: 214)

教科書の説明を読む前に、(1a) と (1b) の括弧内の違いについて、説明できた学生は、これまでほぼ皆無だったように思われる。(1a) と (1b) は、外見上はまったく同じに見えるので特殊な例と言えるが、(1a) は時制を持った節 (tensed clause) で定形節 (finite clause) であり、(1b) は時制を持たない節 (tenseless clause) で非定形節 (nonfinite clause) である。

これらの節はそれぞれ (2a) と (2b) の括弧内のように違う形をしているのが通例である。

(2) a. I said that [Mary signed my yearbook].

b. I want [Mary to sign my yearbook].

(Carnie 2013: 213)

しかし、(2) の例で同じ質問をしてみても、満足な回答をする学生はそれほど多くないのである。英語専攻の大学4年生でも、定形節と非定形節の違い（あるいは節と句の違いであっても）に特に注意を払ってこなかったことになる。英語学習上、それで影響がないものなのであろうか。影響があるのではないだろうか。本稿では学習英文法においてもこの二つを区別することの重要性を主張したい。

2. 学習英文法への非定形節導入の意義 (1) 一句と節の統一的な扱い—

金子 (2018) は、節の概念を定形時制の存在に基づいて定義する従来の学習英文法の捉え方の問題点を指摘し、定形節に加えて非定形節の概念を導入すべきだと主張している。

代表的な文法書である Quirk (1985) や Huddleston and Pullum (2002) では非定形節の概念が導入されているのに対して、日本の学習英文法では導入されていない。したがって、(3b) は to 不定詞の名詞用法であり、名詞句とされる。しかし、学習英文法でも whether は従属節を導く接続詞とされるので、(3b) の括弧内は節 (名詞節) とみなしてしかるべきであるという。

さらに、不定詞疑問節を認め、(3a) と (3b) の括弧内を共に疑問節とするなら、主節動詞 know の選択特性について、「疑問節を目的語とすることができる」と統一的に述べることができるという。

- (3) a. She didn't know [whether he would come].
b. I don't know [whether to laugh or cry at his jokes].
(金子 2018: 227)

次の (4) は日本の学習英文法では、不定詞の形容詞用法であり、形容詞句とされる。

- (4) a. The point the Tories seem to be making is that anything is better than going to the sort of university that most graduates go to, and if you can't go to Oxford or Cambridge the best thing [_{clause} ϕ to do _] is not to go anywhere.
b. ... the best thing [_{clause} for you to do]...
c. Words are still the best weapons [with which to come to terms with ageing, and what Beckett calls "failing better"].
(金子 2018: 227-228)

しかし、括弧内の部分を to 不定詞による関係節と考えるならば、①これらの例の to 不定詞の動詞句内に空所が存在する、② (4b) のように主語が for を伴って顕在的に生起することがある、③のように (4c) 前置詞を伴って関係詞が生起することがある、などの現象は、関係節の共通特性として定形関係節と統一的に説明することができるという。

以上のように金子 (2018) は不定詞疑問節と不定詞関係節を例にとり学習英文法に非定形節の概念を導入する根拠を示した。そのためには少なくとも次の3点を認める必要があるという。第1に、定形時制が生起するもののみを節とみなす制限を廃棄すること。第2に、顕在的主語が生起しないことも節とみなさない要因の1つになっているので、非顕在的主語の存在を認めること。第3にもともと従属節の主語であったものが主節の要素として生起する場合を説明するために、主語への繰り上げと目的語への繰り上げの考えかたを採り入れること、であるという。

英語学研究で用いられるいくつかの基本的な考えを取り入れたうえで、節を「主語と述部の叙述関係 (predication) が成り立つ構造上のかたまり (すなわち構成素)」と規定すれば、非定形節の概念を学習英文法に導入することが可能であるという¹⁾。

許される。

- (10) a. I think [he will eat asparagus].
b. I want him to eat asparagus. (cf. *I want him will eat asparagus.)
(Carnie 2013: 215)

4. 非定形節導入の意義—まとめ—

第二節では、疑問節と関係節を例にとり、句を非定形節と認めることによって、統一的な説明が可能になるので、学習英文法への非定形節の導入を主張した金子 (2018) を概観した⁴⁾。

第三節では、Carnie (2013) に従って定形節と非定形節の違いを見た。筆者は学習英文法に非定形節を導入することに賛成であるが、導入のためにいろいろといわゆる理論武装するのではなくて、実際の教育現場では、あっさりとし制を持つ節、時制を持たない節という形で導入してしまって、Carnie (2013) の指摘したような事実を使って定形節と非定形節を区別することの方が学習者にとって有益だと思うのである。たとえば、次の例を見てみよう。

- (11) My father would not let John and () go to the concert.

「空所には I か me のどちらが入るのでしょうか?」, という問いに対して、何も考えさせずに「let me know とか let me see という言い方があるでしょう。だから me です。」

という指導法もあるかもしれない。おそらく多くは「let は使役動詞なので、その次に目的語が来て、その次に動詞の原形が来ます。だから me です。」という指導になるかと思われる。しかし、非定形節を導入するならば、(7) の指摘のように「定形節 (時制を持った節) の主語は主格、非定形節 (時制をもたない節) の主語は対格 (目的格) になります。というより一般的な説明が可能になるのではないだろうか。しかし、より一般的な説明より重要なことがある。(1) のように外見上、まったく同じ場合でも「(1a) の you は主格で (1b) の you は目的格です。(1a) の eat は時制を持っています。過去形にしたら ate になります。(1b) の eat は時制を持っていません。原形です。to はないけれど不定詞と同じです。」と説明して定形節と非定形節の違いをはっきりと認識させておくと、使役動詞構文、知覚動詞構文に限らず、頻繁に出てくる非定形節を正確に読む力、非定形節を使って正確に書く力といった英語の理解力、運用能力の向上に役立つと思われる。

注

- 1) 金子 (2018) は少し複雑なように思われるので、この根底にある考え方として中村 (2018: 17) を引用する。説得力のあることばである。「埋め込み節を教えるときには必ず that 節 (つまり文としてのすべての要素が揃っている完全文 (full sentence) との関係性を軸に、時制要素の代わりに to が用いられているのが不定詞節、名詞語尾 -ing が用いられているのが動名詞節、分詞語尾 -ing が用いられているのが分詞節である、というように、時制のない文を「体系的」に説明することが重要で、それによってこれらの節の本質が理解できると思われる。単にこれらの節の形式を独立に教えるのでは理解は深まらない。

- 2) もともと Radford (1988, 287-292) のテストであるが, 例文を統一するため Carnie (2013) から引用する.
- 3) 非定形節といった場合, 通常, 原形, to 不定詞形, ing 形, ed 形を含む. Huddleston and Pullum (2002: 1173) を参照. 動名詞の場合は, 対格または属格になる.
- i) I don't like the idea of [them / their / *they leaving for Hawaii tomorrow].
Radford (1988: 292)
- 4) 句という用語の方が学習者の理解を助ける場合があると思われる. 例えば, 次の例では後ろに節が来るのであれば接続詞を用い, 句(名詞)が来るのであれば前置詞を用いるという説明, 逆に後ろに節が来ていれば接続詞を用い, 句が来ていれば前置詞を用いるという説明が明快である.
- ii) Although it rained, we went camping.
iii) Despite the rain, we went camping.

文献

- Carnie, Andrew, 2013, *Syntax A Generative Introduction Third Edition*, Oxford: Wiley-Blackwell.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum, 2002, *The Cambridge Grammar of the English Language*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 金子義明, 2018, 「学習英文法と時の概念をめぐって」, 池内正幸・窪菌晴夫・小菅和也 [編] 『英語学を英語授業に活かす—市河賞の精神を受け継いで—』 開拓社, 217-232.
- 文部科学省, 2009, 「高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編」
- 中村捷, 2018, 『発話型英文法の教え方・学び方』 開拓社.
- Quirk, R., Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik, 1985, *A Comprehensive Grammar of the English Language*, New York: Longman.
- Radford, Andrew, 1988, *Transformational Grammar: A First Course*, Cambridge: Cambridge University Press.

Towards a Better Way of Presenting English Grammar to Learners: Focus on a Distinction between Finite Clauses and Nonfinite Clauses

TAKAHASHI Yasuo

Abstract: Kaneko (2018) insisted on the importance of introducing nonfinite clauses in the school grammar literature so that we can give a unified explanation to question clauses and relative clauses, but we will show that concerning finite and nonfinite clauses, making a distinction between them is more important for English learners.